

紹介

イ・ア・トラハテンベルグ

『第二次大戦後における資本主義の貨幣および信用制度』

拝 司 静 夫

ここに紹介するイ・ア・トラハテンベルグ「第二次大戦後における資本主義の貨幣および信用制度」の原著はロシア語で書かれ、一九五四年にモスクワで出版された。紹介に用いたのはそのドイツ語訳 I. A. Trachtenberg, *Das Geld- und Kreditwesen im Kapitalismus nach dem zweiten Weltkrieg, ueber-
gesetzt von W. Biehahn, 1956, ss. 199, Berlin* である。

トラハテンベルグは、「現代の信用組織」(一九二九年、邦訳、川崎巳三郎、昭和九年)によって戦前からわが国にも知られているソ連の経済学者である。その著述には、そのほか「紙幣——貨幣および流通概論」(一九一八年)、「貨幣および信用概論」(一九三〇年)、「現代の信用恐慌」(一九三三年)、「貨幣恐慌、一八二一—一九三八年」(一九三九年)、「戦争の金融的総括、インフレーションの問題」(一九四六年)、「資本主義的再生産と経済恐慌」(一九五四年、邦訳、飯田貫一「再生産と恐慌」昭和三二年)、「アメリカ合衆国のインフ

レーションと貨幣、信用制度の逼迫」(一九五七年、邦訳「現代資本主義論」所収、昭和三三年)などがある。これらの著述からもうかがえるように、著者は貨幣、信用、恐慌などを主たる研究の領域としている。

本書の構成は次のようである。

序 論

第一章 資本主義における基本的経済法則と貨幣および信用

制度

第二章 資本主義的生産方法と貨幣制度、貨幣制度の危機

第三章 インフレーション、インフレーション過程の形態と

内容

第四章 第二次大戦期および戦後におけるインフレーション

現代インフレーションの特殊性

第五章 インフレーションと資本主義的再生産、インフレー

シヨンのな軍事経済

第六章 資本主義的生産方法と信用、銀行信用の危機

第七章 貸付資本市場、有価証券市場

第八章 現代銀行の授信業務、銀行信用と国家財政

結語

ところで本書の出版された一九五四年には前記のように、著者によって「資本主義的再生産と経済恐慌」(邦訳書、前出)があらわれている。この二著は相互に関連し、補充しあつており、紹介書は同じ問題に貨幣、信用の側面からアプローチするものといつてよいであらう。

著者はまず本書の目的と対象を次のようにさだめる。「資本主義の全般的危機は、とくにその第二段階で、資本主義的な貨幣および信用の諸条件の内部に本質的な変化をもたらした。これを理論的ならびに実証的に研究するのはきわめて興味あることである」(S.3)。「しかし本書は、貨幣および信用経済における最近の事象を全面的に分析しようというのではなく、貨幣および信用制度が資本主義諸国の国内経済において演ずる直接的な役割を研究しようとするものである」(ebenda)。但し本位貨幣間の諸関係、外国為替相場、国際信用などは考察の対象外におかれる。

そこで「本書の主要な関心は、第一に、たとえばインフレーションの形態と内容および租税の意義についての論争点を分析すること、第二に、ソ連の文献では全くあるいはほとんど論ぜられていない問題、たとえばインフレーションの再生産過程に

対する影響や、現代インフレーションの特殊性や、軍事インフレ経済や貸付資本および有価証券市場の構造変化、銀行信用と国家信用との結合およびその他のこの種の問題の分析の発展にむけられている」(S.4)。

ここではそのうち、主として貨幣とインフレーションおよび銀行制度と銀行信用に関する部分を簡単にながめてみたいと思ふ。

資本主義的生産方法が貨幣制度に課する要求は、要約すると次のようである。すなわち、貨幣制度の統一性、貨幣単位の価値の永続性、安定性、貨幣流通の安定性と流動性。

それらの要求をもっともよく満足させるのが、金単本位制度であることはいうまでもない。その確立は十九世紀末近く、産業資本主義の時代が終つて帝国主義の時代が始まつたところであつた。しかしそのときすでに資本主義の景気変動は、その安定性と弾力性を破壊しつつあつた。従つてかかる安定性と弾力性とは、相対的なものにすぎない。しかし独占段階にはいつて、生産の集中と独占の支配、銀行の新しい役割と金融資本の成立が進行すると、そのような諸事情は、新しい役割を貨幣制度にあたえ、いや応なしに貨幣機構を変化せしめるが、同時にその安定性と弾力性はいぢるしく動揺せしめられざるをえなくなる。

全般的危機の時代における貨幣制度の変化の核心は次の点にある。すなわち、国内における流通手段としての金が、一九二九—三三年の恐慌以後、資本主義世界において過去のものとな

り、いわゆる管理通貨制度が登場したことである。兌換停止によつて、銀行券は政府紙幣的な性質をもつことになり、その流通は紙幣流通の法則に支配されるようになる。

銀行券の発行方法とその保証は以前とはなはだ異ってくる。

以前は銀行券は私的な手形の代りに発行され、生産および再生産過程と結合する商業信用の道具であつた。それは流通手段に対する国民経済的な需要を示すものであつた。発行された銀行券は、商業信用の決済によつて、発行銀行に還流した。かかる発券方法は銀行券の流通を弾力的にした。銀行券は金と信用によつて保証され、その額面価値を金鑄貨の価値と一致せしめた。

だが大恐慌以後、金本位制が放棄されると、銀行券は国債を保証として発行されるようになった。すなわち、現代の銀行券は、現実の生産過程と何の關係もない国家信用に支えられている。銀行券は国家への信用供与によつて流通にはいりこむ。かかる銀行券の発行は、信用機構と国家財政との緊密な結合をつくりだす。

通貨を形成する他の要素、すなわち小切手流通も、銀行信用と国家信用の結合によつて本質的に变化する。小切手が機能資本家の一時的遊休資本たる預金にもとづいて発行される間は、それは商品交換による貨幣需要の増大に照応していた。銀行がかかる預金によつて国債を買入れる場合には、少くともそれにとづく小切手流通の増大は起らない。しかし銀行が国債を買ひ、それに対して国家に当座預金勘定を開設する場合は、逆に資産勘定の増加が預金の増加をきたすことになる。かかる預金

は架空のものである。ゆえに、このような小切手流通は、再生産過程、従つてまた国民経済の支払手段需要と何の結びつきももたない。かくて預金および小切手の性質も变化する。

それゆえ、全般的危機における貨幣制度において特徴的なのは、貨幣流通がその弾力性を、貨幣単位がその相対的安定性を失つたことである。従つて、この時期における貨幣制度一般は、かつて所有していた相対的安定性を失っている。

このことのうちに一般に貨幣制度の危機が存する。これは貨幣流通の分野において、資本主義の全般的危機、とくに第二次大戦とその後におけるその深化を反映するものである（以上第二章）。

貨幣制度の変質は当然インフレーションの問題と関連する。

著者は、インフレーションを、三つの指標によつて規定する。不換紙券の流通を前提として、(1)貨幣流通の膨脹、(2)紙券通貨の減価、(3)大資本の利益のための財産と国民所得の再分配、とくに紙券通貨の減価による実質資金の切下げ。

右の三つの指標のうち、第一と第二はインフレーションの形態規定であり、インフレーションの過程はこの二つによつて説明しつくしたことはならないのであつて、第三がその内容を規定するものである（以上第三章）。

さて右の指標によつて、今日のインフレーションを実証的に分析せねばならない。

第一の貨幣流通の膨脹（貨幣の過剰）については、まず戦前の一九三七七年を基準として、一九三七—五四年における貨幣流

通（銀行券と一覽払預金）の増大を、米・英・仏・伊・日の五カ国について検し、それを、工業生産の増大テンポ（米・英・日）および商業取引量の増大テンポ（米）と比較する。かくしてえられる結論は、アメリカでは、右の期間に、貨幣流通は三五四％増大したのに、工業生産は一〇三％の増にすぎず、イギリスでは、前者の二四二％に対して後者は四二％、日本では、前者が二五・七〇％、後者はわずかに三〇％の増となる。アメリカの商業取引量との比較においても、同様の傾向的事実が明らかになる。かくて貨幣の過剰が結論づけられる。そしてその原因は、国家財政が戦争および経済の軍事化のための支出の増大によって膨脹したからであった。

過剰な不換紙券の流通は、不可避免的に第二の指標たる貨幣の減価を来す。これを貨幣の購買力の減少で示すと、一九三七—五四年に、たとえばアメリカでは四九％、イギリスでは六六％、日本は九九・六％下った。かかる購買力の低下はあらゆる資本主義諸国における貨幣制度がきわめて弱められたことを表現するものである（以上第四章）。

第五章はインフレーションと資本主義的再生産の関係をとりあつかひ、とくに現代におけるインフレーションと不可分の戦争および経済の軍事化の問題を考察しているが、この点はむしろ別著「資本主義的再生産と経済恐慌」の主要テーマとなっている部分であるから省略する。

それでは、かかる貨幣制度の変質とインフレーションは銀行信用をいかに変化させるか。

資本主義的生産方法において、元來信用は貸付資本の運動を媒介するものであり、資本主義的信用制度の基礎はいわゆる商業信用にもとづく。そして資本主義の銀行制度は資本の生産および再生産過程に緊密かつ直接に結びついており、銀行信用は再生産過程の本質的部分をなす。資本主義的再生産は、銀行および銀行信用なしには十分な発展をとげることはできない。

そのような銀行信用に要請される要件は、まず第一に、銀行信用の安定性である。そうであつてのみ、銀行は再生産過程に奉仕でき、その手に集積された一国の全貨幣資本を可能な限り有効に利用でき、貸付資本の運動を実現できるのである。

この信用の安定性は次の条件にかかっている。(1)貨幣流通の安定性。この前提が失われると、銀行制度と銀行信用は弱化する。(2)銀行の受信業務Ⅱ貨幣資本の収集と授信業務Ⅱ銀行の処理に委ねられた貨幣資本の分配との均衡。

さらに資本主義的生産方法は銀行信用に流動性を要求する。銀行券および小切手の発行は弾力的でなければならぬ。

それゆえ、資本主義的生産方法が銀行制度に要求するところは、第一にその機関の網の目の稠密、第二に集中、第三に銀行信用の不断の流動性、最後に諸勘定の組織化ならびに貨幣制度の安定性を害しない支払手段の創出である。

だが上述のように、貨幣制度に対する資本主義的生産方法の要請は、結局不断の動揺によって妨害される。そして同様のことが、銀行制度に対する要請についてもみられる。

銀行制度が資本主義的諸関係の下で可能な限りの安定性を獲

得した時期は、貨幣制度の場合と同じく、帝国主義の初期であった。だが他方では、まさにこの時期に、銀行制度の弱化的前提があらわれた。それは資本主義経済の変化、独占資本主義の基本的経済法則および銀行の新しい役割から生じたのである。銀行は金融資本の成立によって、その支配のための道具となった。帝国主義の時代には資本主義の諸矛盾は深刻化する。過剰生産恐慌はいっそう頻繁になり、貨幣価値の安定性と銀行信用の流動性ははなはだしく失われる。

この時代になると、有価証券業務が銀行業務のもっとも重要な領域となる。それは銀行信用の安定性に影響を与えずにはおかない。商業手形の代りに、国家債務が銀行券の保証として用いられるため、銀行券はその価値がけつして安定的でないところの政府紙幣に似てくる。

その上有価証券業務は仮空預金の創造を容易ならしめる。

かくて帝国主義の初期に、銀行信用の安定性喪失の可能性が生じたが、全般的危機の時代にはこの可能性は現実となった。第二次大戦および戦後には、全般的危機はいっそう深刻化する。貸付資本の生産的使用はますます可能性に乏しくなり、その減価のいっそうの進行は全資本主義的信用制度をさらに苦境におとしめる。

この時期には、戦争と経済の軍事化ならびにこれと結合した国家支出が重大な役割を演ずる。銀行は戦争および経済の軍事化をまかなうことに強く参加する。銀行の資金の大部分は軍事支出のための融資に、従って不生産的に投ぜられる。

銀行の資金が生産的に使用される場合でも、それが必ず債権の実現を保証するものではないことはいうまでもない。それは資本主義の景気変動によって動揺せしめられる。そして過剰生産恐慌は、全般的危機の時代に至って、さらに頻繁に、激しく、永続的になっているので、銀行信用の流動性はこの面からも失われることになる。

銀行信用の安定性と流動性の喪失は、また反対に全般的危機をいっそう深刻化する（以上第六章）。

銀行の独占が進み、その運用資本が老大になり、かつ銀行業務の主要部分が、有価証券投資によって特徴づけられるとすれば、貸付資本市場と有価証券市場の変質の分析が次の課題となる。

貸付資本として用いられる貨幣資本の蓄積テンポが、現実資本の蓄積テンポ、すなわち拡大再生産のテンポを凌駕するということは、資本主義的生産方法の一般的傾向である。その傾向は帝国主義から全般的危機、さらにその第二段階に進むにしたがつていっそう顕著になる。

しかもこれらは、貨幣の減価が行われるという条件の下で進行するのである。貨幣の減価は再生産過程に影響し、国民所得の再分配をもたらし、独占資本の最大限利潤獲得のために利用されるが、同時に貸付資本の減価をきたし、資本市場を弱体化する。ただし信用はその安定性を失い、信用関係の秩序は破れるからである。

一方、資本主義の発展にともなう、有価証券、すなわち国債、株式、社債の増加があらわれる。有価証券一般の増大傾向のう

ちにあつて、政府証券と私企業証券のそれぞれの増加テンポ、および両者の関係が変化することに注目しなければならぬ。

私企業証券の発行は、独占以前の資本主義期から全般的危機の時代における相対的安定期まで、すなわち一九二九年までは政府証券の発行に比して優勢であつた。

しかるに大恐慌以後大変化があらわれ、政府証券が証券市場を支配しはじめた。貸付資本市場は強く国家信用によって要求されるようになった。

第二次大戦の間、この傾向はいっそう強まった。国家債務は膨脹し、国債はいちじるしく増加した。その一方、私企業証券の発行は、絶対的にも相対的にもいよいよ僅かになった。

戦後この関係は多少変り、国債の相対的地位は減少し、私企業証券のそれは増大した。しかしそれらの変化はさして大きくなく、国債の支配的地位は不変である。戦後、一九四五—五四年に、アメリカでは、国債の増減は差引ゼロ、私企業証券の発行増は五八〇億ドルであつた。しかし一九三九—四五年の国債発行高は二、九三三億ドル、私企業証券のそれは五三億ドルであるから、戦後の多少の変化は全体の構造を変化させるようなものではない。イギリスもまた同様な状況である。

ところで、国債と私企業証券との間には重大な差異がある。国債によって表現される仮空資本の運動は、生産過程となんら直接の結びつきをもっていない。この結びつきはむしろ国家財政を通じて間接に再構成されるにすぎないのである。

貸付資本の投資対象としての有価証券、とくに国債の意義の

増大は、不可避免的に信用制度およびそのもっとも重要な部分たる銀行信用の機能を変化せしめる（以上第七章）。

かかる変質の姿をとらえるには、第一に、銀行がいかに強く軍事予算の資金調達、すなわち国債の発行に参加しているか、第二に、そのために銀行業務がいかに変化したかを明らかにせねばならぬ。これが第八章で、また全篇の結論ともなる。

第二次大戦中に発行されたアメリカの国債のうち、公共団体引受分を除くと、商業銀行がその約五分の二を、全銀行が二分の一以上を、全金融機関が五分の三以上を保有している。イギリスにおいてもほぼ同様である。つまり国家信用は銀行信用によって支えられ、国債の増大は、その大部分が銀行預金——遊休貨幣資本および国民の所得からなるところの——を吸い上げることによってまかなわれた。

戦後、かかる状況はなるほどいくらか変化した。アメリカについていえば、銀行の国債投資の絶対額および相対的地位は若干減少し、公共団体および一般会社のそれは増加した。

このような変化はあつたが、しかし今日でも、国家信用は、その多くが銀行およびその他の金融機関の資金でまかなわれている。その程度は国によって異なるが、一般に高い。最近では、公共団体引受分を除く国家債務のうち、三〇ないし五〇%が金融機関によって支弁されている。

国家財政と銀行信用との緊密な結合関係は、一九二九年—三年の世界恐慌以後に發展し、全般的危機の第二段階に至つていっそう強度をました。銀行信用の機構は変化し、銀行信用は

主として国家財政の需要に應ずるものとなっている。国家と同じく、銀行もまた支配的な独占の手中にある。国家信用と銀行信用とのからみ合いは、国家独占資本主義的傾向の現象形態の一つである。

かかる事情は、銀行業務を本質的に変化せしめた。

アメリカの資料によれば、同国の銀行の授信業務は、貸付と投資の二勘定に大別されるが、第一次大戦まで、銀行の預金はすべて貸付に用いられ、従って直接に国民経済に奉仕していた。貸付は商業信用が表現される形態、すなわち機能資本家が相互に与え合う信用の通常の形態である。貸付を与えることによって、銀行信用は商業、生産、再生産と直接に結合する。

第一次大戦時には、銀行の資金運用には本質的な変化はなかった。その後大恐慌勃発までは、貸付の絶対額は増加したが、その相対的地位は低下した。しかしまだ預金の七〇％は貸付に用いられていた。

大恐慌の時期には顕著な変化が生じて、貸付は絶対的にも相対的にも減少した。もともとまだ預金の五三・八％はこれにむけられてはいた。だがこれと同時に、政府証券への投資が増加し、預金に対するその比率は一九二八年の一二・八％から一九三三年の三〇・七％に高まった。恐慌の後、貸付の相対的減少と政府証券投資の絶対的ならびに相対的増加が続いた。

第二次大戦において、右の傾向はいっそうはなだしくなり、その結果として、銀行業務の急激な変化が起った。一九三九—四五年に貸付額は増加したが、預金総額に対する割合は三五・一

％から一九・六％におちた。他方、政府証券投資額は五倍半に増加し、預金に対する比率は三五・八％から六七・五％に上昇した。

以上から、第二次大戦中に、銀行信用と国家信用との結合が強化され、他方、銀行信用と国民経済、すなわち、生産および再生産との結合が弛緩したことは明らかであるが、さらにこれを銀行の授信業務（貸付および投資）の内容について検討すると、いっそう顕著になる。連邦準備制度加盟銀行についてみると、私経済への信用供与（貸付）ならびに私企業証券への投資の絶対額は、大恐慌時を除いて増加してはいる。だがその水準は、一九四五年になっても、一九二八年のそれを回復していないことに注意せねばならぬ。そして両者の相対的地位は下降を続けた。それらは、一九一四年には貸付および投資総額の九〇・六％を占めたが、一九四五年には二七・〇％に下った。反対に、国債投資は絶対的にも相対的にも増加し、一九一四年の九・四％から一九四五年の七三％に達した。大戦終了時、国家への信用供与は国民経済への直接的信用供与額の約三倍に達した。この量的な変化のうちに、銀行信用のいぢりしい質的变化が示されている。イギリスについても同様な事実がみられる。

すでに述べたように、国債の発行量や引受けの状況は、戦後多少変化し、それに応じて銀行の業務範囲にもある変化が生じた。銀行は政府証券への投資を制限し、反対に国民経済への金融を増加せしめた。しかし、それゆえに銀行信用と国家信用との結合もゆるんだわけではなく、また銀行の活動が国家財政の要求に従属するという事実がなくなったわけでもない。第二次

大戦終了後も経済の軍事化はいっそう進行したから、資本主義国家はこの目的のために財政支出の大半をあてた。従つて銀行は第二次大戦後も経済の軍事化の道具としてとどまつている。

再びアメリカの資料によれば、連邦準備制度加盟銀行の貸付は、一九四五年の二二八億ドルから一九四四年の六〇二億ドルに増加した。預金に対する比率は、一九・六％から四二・五％になった。他方投資勘定は八四四億ドル（預金に対する比率七二・八％）から七一四億ドル（五〇・五％）に減少し、そのうち政府証券への投資は七八三億ドル（六七・五％）から五七八億ドル（四〇・八％）へと下つた。すなわち、預金に対する投資勘定の比率は減少し、国債投資の比率も下つている。

この点からいへば、戦後、銀行信用と国家信用との結合は弛緩したといえるが、これは大部分、国債の残高がほとんど変動せず、他方、公共団体による引受部分が多くなつたためである。

しかも今日でも、銀行の債務（預金）の五分の二が国家信用によつて支えられている。この事実を、第一次大戦前および大恐慌前には、国家への融資のために預金のわずか一二・一五％、すなわち六分の一程度が用いられていた事実と比較せよ。

だから戦後、銀行信用と国家信用との結合がゆるんだとはいつても、それは戦時との比較においてであり、結合は今日でもなお緊密で、銀行は国家財政、国家債務に強く依存している。

同様のことは、貸付および投資の合計額に対する国債投資の関係をみても結論しうる。戦後、それは絶対的にも相対的にも減少したが、それでもなお約四五％程度を占めている。

これらのことから、戦後、銀行信用と現実資本の再生産との直接的な結合関係は弛緩したことが実証される。この結合は国家財政を通じて再構成されることになる。これは銀行信用の変質の明らかなメルクマールといえる。

イギリスも同様で、銀行信用と国家信用との結びつきはいくら弱まったとはいえ、今日においてもなお緊密で、戦前より確固たるものとなつている。

ところで、上乗の分析では、貸付勘定がすべて直接に現実資本の生産および再生産に役立っている、つまり生産的に使用されていると前提したが、実際にすべての貸付がそうなのではない。その一部分は架空資本の運動を媒介し、それよりさらに大きい部分は消費的目的等々に奉仕している。

銀行貸付のどの部分が現実資本の生産および再生産過程に直接にはいりこむか。アメリカの資料によれば、同国の銀行は貸付を商業信用、有価証券売買信用、不動産信用、消費者信用等々の勘定に区分している。このうちで、直接に再生産過程に役立つのは、商品信用を媒介する如きものである。有価証券売買信用は架空資本の運動を媒介し、不動産信用および消費者信用はなんら生産的目的によつて規定されない。

もちろん架空資本および不動産の運動は再生産過程と全く無関係ではない。しかしその関連は間接的であつて、意義は低い。

生産過程および再生産過程は信用の返済を保証する。それによつて銀行信用の流動性が決定される。現実資本の生産および

び再生産過程と直接に結びつかない信用の供与は銀行信用を弱体化する。

第二次大戦中、軍需産業の好況のため、工業生産物の量はいぢるしく増加した。それに反して、商業信用は一九三九年の五八億ドルから一九四五年の八九億ドルへときわめて僅かしか増加しなかった。その預金に対する比率は、同じ期間中、一四・五%から七・七%に下った。貸付信用全体ならびに商業信用は年を追うてその意義を減少した。

商業信用の減少は種々の事情にもとづくが、第一には、独占体が巨大な利潤を得た結果、龐大な貨幣資産を蓄積したこと、第二には、生産物の買手が主として国家であり、供給者は直接に国家から支払われたこと、最後に、供給者に対する支払は発注の際に一部分前払いされたことによる。これらすべては供給者——それが最大の独占体であることは明らかである——が銀行信用を必要としない方向に作用したのである。

戦後状況は多少変った。貸付のうちの商業信用勘定は一九四五—五四年に八九億ドルから二五〇億ドルへ、預金に対する比率は七・七%から一七・七%へと絶対的にも相対的にも増加した。しかし、今日においても、預金の約五分の一が商業信用にむけられているのにすぎないのであって、銀行の貸付業務を本質的に変化させるものではない。

かくて著者は、もつとも主要な資本主義国（とくに米・英）における銀行業務の分析を通じて、全般的危機、とくにその第二段階における銀行信用の変質に関する一連の重要な結論が導

きだされるとする。九項目にわたるそれを要約すると、左のようである（S. 161—191）。

一、国家財政——経済の軍事化と戦争遂行に奉仕するところの——への融資は、銀行業務を本質的な部分において規定する要素となっている。

さらに国債への投資のみならず、銀行の貸付も、またその多くの部分が経済の軍事化のために用いられる。

従つて現代の銀行は、戦争と戦争準備のために貨幣的手段を調達することによつて、独占資本が支配する帝国主義国家の膨脹政策遂行のためのもつとも重要な道具となっている。

二、銀行は労働者の搾取をより強化し、資本の集積および集中に寄与することによつて、資本家の利潤を高めるための道具であつた。帝国主義から全般的危機の段階にはいると、銀行はその金融操作、とくに国家財政に融資することを通じて、経済の軍事化に協力し、それによつて、独占資本の最大限利潤獲得のための強力な槓杆となる。

三、銀行の資金を、軍事予算を支弁するための国債に投資することは、その資金を不生産的に使用するのと同義であり、従つて生産力の発展ではなくて、その破壊に貢献することを意味する。預金をこのように使用することは、銀行信用の変質を証明する。この事実のうちに、帝国主義の時代に一般に特徴的であり、かつ全般的危機、とくにその第二段階においていっそう進むところの資本主義の腐朽があらわれている。

四、銀行信用と商業信用との結合は、全般的危機、とくにそ

の第二段階においてはなほ大きく弛緩した。銀行が国債に大きな投資を行い、一般の信用供与——再生産過程に対する直接的金融——を相対的に制限することは、銀行信用が国家信用によつて支えられるという結果をきたす。銀行信用と国家信用との結合および両者の相互制約關係が重要な意義を獲得する。

五、銀行信用は常に現実資本の生産および再生産過程と、また剰余価値および資本主義の利潤の形成と結びつき、かかる要素によつて規定されている。この結合と依存關係は、なお今日でも存在する。しかしその形態および内容は變化した。

以前には、銀行信用は現実資本の再生産過程と直接に結合していた。しかし今日では、その結合は国家財政によつて媒介され、実現される。銀行は国家財政に貨幣を供給し、国家財政はこの貨幣を私経済に移転する。その結果、再生産過程の矛盾から生ずる銀行信用の矛盾は、さらに国家財政の矛盾を拡大し、いっそうそれを複雑ならしめる。銀行信用と国家信用との緊密な絡み合いは、銀行信用の安定性を強めず、反対にこれを弱める。

六、同じ事情は銀行信用の流動性をも失わしめる。銀行信用の流動性は、銀行が常にその責任を履行しうることによつて保証される。すなわち、銀行が預金を払い戻しうる保証は、授信業務が主として貸付から成っている場合には、労働者による剰余価値の生産と、銀行債務者としての資本家によるその取得によつて与えられていた。

ところが、授信業務の主要部分が、国債投資によつて占められるようになると、国家信用が銀行の義務履行の直接的な保証

となつてくる。しかし国家信用は、国家債務の龐大な累積とインフレーションの進行の際にはもはや安定的ではありえない。独占資本の利益になるように、国民所得を再分配するところの国家信用をまかない、かつこれによつて支えられることによつて、銀行信用はその流動性を減少する。

かくて銀行信用の流動性が失われると、銀行は、独占以前の資本主義期に特徴的であつた媒介者としての機能を果しえなくなるのみならず、帝国主義の時代に課せられた国内の全貨幣資産を処理するという任務をも遂行しえなくなる。

七、銀行制度は事実上支配的な巨大独占に所有されており、この巨大独占は銀行の資金を自由に処理している。しかも今日の諸事情では、国家の最大の独占への従属が特徴的である。ゆえに銀行信用と国家信用の緊密な絡み合いは、国家独占資本主義的傾向の進展の表現である。

八、銀行の国債投資は、単に蓄積された貨幣資本から成る機能資本家の預金によつてのみならず、仮空預金の創造によつても支弁される。これは経済界における貨幣需要の増大と何の關係もない支払手段の増加をきたす。従つて国債への投資は、貨幣の減価とインフレーションの進行を促すことになる。

九、インフレーションは、さらに銀行資産にもはね返る。その実質価値は、支払手段の減価によつて名目価値以下に下る。もっとも、銀行の収益性は、その債務もまた債権と同じ程度に減価するために影響されない。しかし銀行は貨幣の減価によつて弱められ、経済的な権勢を失う破目に追いやられる。

すべてこれらの諸事情は、銀行制度が深刻に動揺せしめられていることを示すものである（以上第八章）。

以上きわめて簡単かつ不十分ながら、本書の内容を要約してみた。

本書の意義は、第二次大戦後、全般的危機の第二段階において、貨幣・信用制度の変質と、それが資本主義の矛盾の拡大に果す役割を、実証的に分析、規定したことにあり、かかるものとして、その成果は十分に評価されてよいと思われる。そのために、著者は多くの数的資料を利用しており、それがまた本書の特長でもあると思われるが、紙数の関係でこれを省略した。

もつとも、そこに問題ないし疑問がないわけではない。著者の関心は、主として「貨幣および信用制度が資本主義諸国の国内経済において演ずる役割」(63)、つまり資本主義の基本的法則の発展——その矛盾の激化に果す役割にむけられている。そのこと自身は正しいとしても、その反面、戦後かなり顕著になってきたところの、矛盾の激化をひきもどし、あるいはおしとどめ、あるいはひきのばそうとする諸方策、機構、制度に対する関心はうすいように思われる。それらは、結局において、独占資本の最大限利潤確保のためであり、基本的法則の貫徹を抑止することはできないではあろう。また著者は既述のように、本書は貨幣および信用経済における最近の事象を全面的に分析しようとするものではない、とことわっている。しかし、今日の問題としては、それら諸手段の意義およびとくにその限界

を、理論的ならびに実証的に、いわば測定することが要請されているのではなからうか。

たとえば、貨幣およびインフレーションの問題において、政府紙幣と不換銀行券の相違に關し、著者は「国家債務によって保証される銀行券および小切手は……前世紀の政府紙幣とはいくらか違っている」(63)と述べているが、さらに掘り下げた理論的分析は行われていない。従って現今わが国で論議されている不換銀行券の伸縮性の問題などにはふれるところがない。またこれと関連して、最近におけるインフレーションの緩慢な進行ないし停滞現象も、著者のいわゆるインフレーションの形態規定の面において、インフレーション理論の一段の発展を要求しているように思われる。

さらに銀行および銀行信用については、著者はその変質——安定性および流動性の喪失——のメルクマールを、巨大独占資本の支配の下での、銀行信用と国家信用の結合の緊密化に求めているが、著者自身も指摘するように、戦後、この結合関係は、戦前に比すれば依然高い水準にあるとはいえ、幾分の弛緩現象を呈している。わが国の如きは、戦後、国債の新規発行の停止によって、その意義は表面的にはきわめて軽くなっている。そうだとすれば、この変質の進行を検証するためには、銀行の国債投資のみならず、その他の銀行業務についての、より立ち入った分析が必要となろう。たとえば、私企業証券への投資の意義も、いっそうの論究の対象となろう。この点、著者の政府証券と私企業証券の異同に關する見解は、あまり分明でないよう

に思われる。また、戦後再び増加傾向にある貸付、とくに商業信用の内容も、それが短期流動的な形式をもちながら、実質的には長期固定的なものに変化し、かくて銀行信用の安定性・流動性を弱体化せしめていかななどの点からさらに検討を要しよう。そしてさらに、戦後における中央銀行の国有化および中立化の問題、あるいは金融政策の変化なども、右の事情と関連せしめつつ、研究することが要請されるのではなからうか。

以上は、あるいは著者の限定する対象領域をこえる要請であって、批判というにはあたらないかもしれない。しかし今日、この分野での重要な問題は、資本主義経済の現実における貨幣および信用制度の位置と役割を測定すること——もちろん基本的諸法則との関連において——にあると思われる。これらの点について、著者の研究成果が発表されることを期待したい。